

先に捨てたのはあなたですよ？

私と子供より、

夫は幼馴染とその子供のほうが大切でした。

マリア

オスカーの幼馴染で愛人。
シングルマザーなのをいいことに、
オスカーにわがママを
言って振りまわしている。

オスカー

レインバーク侯爵。
現国王の弟。
マリアを愛人として囲い、
彼女の子供・カイルを
甘やかしている。

カイル

マリアの子供。
元気だが、少々乱暴な
ところがある。

レオナルド

ヴェルンシュタイン辺境伯。
冷徹な性格から
「氷の宰相」と呼ばれている。
エリザに頼まれ、オスカーへの
復讐を手伝うことに。

エリザ

レインバーク侯爵夫人。
夫・オスカーの浮気に
長年悩んでいたが、
とあるできごとがきっかけで
我慢がなくなりました……？

ノア

エリザとオスカーの子供。
聡明で聞き分けがいい。

プロローグ

蠟燭の炎が、じりじりと音を立てて芯を焦がしている。

屋敷の食堂にある広々としたテーブルには、銀食器が整然と並べられていた。磨き上げられたカトラリーは、主の不在を嘲笑うかのように冷たい輝きを放っている。

柱時計が重々しい音を立てて、夜の十時を告げた。

「……奥様。これ以上はお体に障ります」

老執事のセバスチャンが痛ましげな表情で、エリザ・フォン・レインバークに声をかけた。エリザは胸の内を整えながら顔を上げる。

七回目の結婚記念日である今夜のために用意させた極上の鴨のコンフィは、厨房で温め直されることもなく冷え切っているのだらう。

「オスカー様はまだ戻らないの？」

「はっ……。先ほど、使いの者が参りました」

「使いの者？ ご本人ではなく？」

セバスチャンが言い淀む。そのわずかな間の取り方でエリザはすべてを悟った。ああ、またあ、

ら、か。胸の奥に鉛を流し込まれたような重苦しさが広がる。

「……マリア様が、急な発熱で倒れたとのことだ」

「発熱」

エリザは小さくため息をついた。マリアは夫オスカーの幼馴染であり、一年前に離婚した男爵令嬢。

そして、あるうことか夫が屋敷の近くに別邸まであてがって世話をしているかわいそうなシングルマザーだ。

先週は「息子のカイルが怪我をした」、その前は「嵐が怖くて眠れない」、そして今夜は「マリアが発熱」。

「……そう。それは大変ね」

エリザの声は、驚くほど平坦だった。普通ならここで怒るべきなのかもしれない。

皿の一枚でも割って、「私とあの女、どっちが大事なの！」と叫べば、少しは気が晴れるのだろうか。

けれど、エリザはヴァルティア公爵家の娘として厳しく育てられた。感情を露わにして取り乱すなど矜持が許さない。

それに何より夫は困っている友人を助けるという、彼なりの正義を行っているつもりなのだ。そこを責めれば、エリザが心の狭い冷酷な妻になる。それが彼の理屈だった。

「使いの者は、オスカー様はいつ戻ると言っていたの？」

「それが……マリア様の容態が落ち着くまで、ついていてやりたいと」

「……結婚記念日のディナーをすっぽかして？」

「申し訳ございません」

セバスチャンが深く頭を下げる。彼が謝る必要などないのにといいながら、エリザはナプキンをテーブルに置いた。

「セバスチャン、主治医のスタン先生を呼んでちょうだい」

「えっ？ 奥様、お加減が……」

「違うわ。マリア様よ。発熱で倒れたのでしょうか？ 素人のオスカー様がついていたところで、何の役にも立たないわ。専門家を派遣するのが、本妻としての『務め』でしょう？」

心配するふりをして様子を見に行こうと、エリザは立ち上がった。

いや、ふりではない。万が一、本当に重篤なら大変だ。そう、エリザは正しいことをする。誰に恥じることもない正当な行いだ。

そう言い聞かせなければ、惨めさで足がすくんでしまいそうだったから。

馬車の車輪が石畳を叩く音が、エリザの鼓動の音と重なる。

マリアの住む別邸は、馬車で十五分ほどの距離にあった。皮肉なことに、そこはかつてエリザとオスカーが新婚時代を過ごすはずだった離れた。

「マリアには住むところがないから」と、オスカーが強引に彼女を住まわせてしまった場所。

夜気は冷たく、馬車の窓ガラスが白く曇っている。

隣には、急な呼び出しにもかかわらず駆けつけてくれた主治医のスタンが控えている。彼は何も聞かず、ただエリザの横顔を気遣わしげに見つめていた。

「到着いたしました」

御者の声と共に、馬車が止まる。エリザは窓の外を見た。

「……あら？」

違和感があった。

熱を出して倒れている病人がいる屋敷にしては、あまりにも明るい。

一階の食堂からは煌々とした明かりが漏れ、カーテンの隙間から暖かな色が溢れ出ている。

もしや、医者と呼ぶ暇もなく慌てふためいているのだろうか。

「急ぎましょう」

エリザはショールを羽織り直し、馬車を降りた。スタンも慌てて後に続く。

二人分の足音が砂利を踏みしめた、その時だった。

『あはははは！ オスカーったら、やめてよお！』

甘ったるい笑い声がエリザの耳に届いた。思わず足が止まってしまい、心臓が嫌な音を立てて跳ねる。

明らかに病人の声ではなくて、とびきり楽しそうなマリアの声だ。

『ほら、カイル。もつと食べ。男の子なんだから大きくならないとな』

『うん！ これおいしい！ やっぱりパパの切ってくれたお肉は最高だね！』

パパ？

その単語が、鋭利な刃物となつてエリザの鼓膜を突き刺した。

カイルの父親はマリアの元夫だ。エリザの夫、オスカーではない。

だというのに、あの子供はオスカーをそう呼んでいるのか？ そしてオスカーは、それを訂正もせずに受け入れているのか？

エリザは吸い寄せられるように、明かりの漏れる窓辺へと近づいた。

レースのカーテン越しに見える光景。それは、あまりにも残酷で、あまりにも幸せな家族の食卓だった。

暖炉には火が入り、部屋全体をオレンジ色に染めている。テーブルの中央には、湯気を立てる家庭的な煮込み料理。

マリアは繊細なレースがあしらわれたネグリジェのような部屋着を纏い、顔を赤らめてワイングラスを傾けている。

熱があるようには見えない。ただ酔っているだけだ。

そして、その隣にはオスカー。彼は上着を脱ぎ、シャツの袖をまくり上げて、甲斐甲斐しくカイルの皿に料理を取り分けている。

エリザとの食事では一度も見せたことのない、無防備で安らいだ笑顔だった。

『マリア、大丈夫か？ 顔が赤いぞ』

『んふふ、もう大丈夫よお。オスカーが来てくれたから、お熱なんて飛んでいっちゃったみたい』
『まったく、お前は子供の頃から手がかかるな。俺がいなくて何もできないんだから』

呆れたように言いながらも、オスカーの目尻は下がっている。

愛おしそうにマリアの髪を撫でる手は、エリザが何年もずっと求めていたものだ。結婚記念日の夜に、妻が待ち続けていた温もり。

――ブツン。

エリザの中で、何かが切れる音がした。

怒りの導火線ではない。妻と夫を繋ぎ止めていた最後の一本の糸。情とか、義務とか、淡い期待とか呼ばれるものが音もなく断ち切られたのだ。

エリザは今日、七回目の結婚記念日を迎えるにあたって、夫のためにドレスを新調した。息子であるノアも、父親に会えるのを楽しみにして、眠い目をこすりながら待っていた。

「お父様、来てくれるかな」と不安げに呟く彼を「大丈夫よ」と寝かしつけたばかりだ。

なのに、オスカーはここにいます。本当の家族を冷たい屋敷に置き去りにして、ここでおま、ま、ごに興じている。

「……奥様」

背後からスタンが気まずそうに声をかけてくる。

エリザは深呼吸を一つした。冷たい夜気が肺を満たし、熱くなりかけた頭を急速に冷ましていく。
(泣くものですか。こんな茶番劇のために、涙の一滴でも流すなんてもったいない)

「行きましょう、先生」

「えっ？ あ、あの中に踏み込まないのですか？」

「ええ。病人はいないようですもの。それに……」

エリザは窓ガラスに映る自分の顔を見る。

そこには、悲嘆に暮れるレインバーク侯爵夫人の顔はなかった。

氷のように冷たく、けれどどこか清々しいほどに無表情なヴァルティア公爵令嬢がいた。

「他人の家庭の団欒を邪魔するのは、無作法というものですわ」

エリザは踵を返した。

玄關の扉を開けることもしない。怒鳴り込むこともしない。

ただ、この瞬間、オスカー・フォン・レインバークという男は、エリザの人生から消えることが確定した。

エリザの心の中で、彼はすでに他人以下の存在へと成り下がったのだ。

馬車に戻る足取りは、来る時よりもずっと軽かった。明日からは忙しくなる。

愚かな夫と、図々しい愛人と、その子供。彼らが築き上げたこの身勝手な砂上の楼閣を、基礎から徹底的に叩き壊すための準備をしなくてはならないのだから。

見上げると、夜空には満月が輝いていた。それはエリザの行く末を照らすように冷徹で、それでいて美しく冴え渡っている。

「さようなら、私の愛した人」

小さく呟いた言葉は、夜風にさらわれて消えた。
屋敷に戻ったら、まずは冷え切った鴨のコンフィを処分させよう。そして明日、一番に弁護士と
唯一無二の協力者たちに手紙を書くのだ。
エリザの本当の人生を始めるために。

第一章 エリザの逆襲

翌朝の食堂は、針の落ちる音さえ聞こえそうなほどの静寂に包まれていた。
エリザはいつも通り、背筋を伸ばして紅茶を口に運ぶ。向かいの席には、二日酔いなのか少し顔
色の悪い夫オスカーが座っていた。
「……あの、エリザ。昨夜はすまなかった」
パンにバターを塗りながら、オスカーが様子を窺うように切り出した。エリザはカップをソー
サーに戻し、彼を見ずに答える。
「いいえ。マリア様の看病でお忙しかったのでしょうか？ 大変でしたわね」
「そ、そうなんだ！ あいつは体が弱くてね。放っておけなくて……。理解してくれて嬉しいよ」
オスカーの声が明るくなる。
ああ、この人は本当に気づいていないのだ。妻の言葉に含まれた棘にも、屋敷の使用人たちが彼
に向ける視線が氷点下であることにも。
オスカーにとって、エリザは理解ある妻——自分に都合の良い存在ではない。
「それでだ、エリザ。昨夜の詫びと言ってはなんだが、今日は天気も良いし、庭でティーパー
ティーをしないか？」

「ティーパーティー、ですか？」

「ああ。ノアも退屈しているだろう？ それに……実はもう呼んであるんだ」
嫌な予感が背筋を走る。食堂の扉が開き、その予感是最悪の形的中した。

「おはようございます！ オスカー、お邪魔します！」

場違いなほど高い声と共に現れたのは、フリル満載の派手なドレスを着たマリアと息子カイルだった。

使用人が止める間もない無作法極まりない登場だが、オスカーは嬉々として立ち上がり二人を迎え入れている。

「やあ、よく来たね！ 昨日は熱が高かったようだが、もういいのか？」

「うんっ。オスカーのおかげですっかり元気になっちゃった！ 家にいても気が滅入っちゃうから、誘ってくれて嬉しかったあ」

マリアは私の存在など見えていないかのように、オスカーの腕に絡みつく。そして、その足元でカイルがドタドタと走り回り、エリザの椅子の周りを一周した。

「おばさん、お菓子まだ？ 僕、お腹空いた！」

挨拶もないし敬称もない。エリザはナプキンで口元の引きつりを隠した。

これが、自分の夫が「大切にすべき友人」と呼ぶ者たちの姿なのか。

午後、屋敷の庭園で妻と息子へのお詫びの会と称された、地獄のようなティーパーティーが始

まった。

芝生の上には白いテーブルセットが置かれ、最高級の茶葉で淹れた紅茶や焼き菓子が並べられている。

「ノア、ご挨拶なさい」

エリザが促すと、隣に座っていた五歳の息子ノアが椅子から降り、完璧なお辞儀を披露した。

「初めまして、マリア様。ようこそお越しくださいました」

金色のサラサラの髪、宝石のような青い瞳。エリザの自慢の息子だ。年齢よりもずっと聡明で、悲しいほどに空気を読む子供だった。

ノアは、父親が自分よりもカイルを可愛がっていることを知っている。だからこそ、父に愛されようと必死に良い子であろうと努めていた。

「あらあ、ノア君ってば堅苦しいわねえ。子供らしくないっていうか」

マリアはケラケラと笑い、口の端にクリームをつけながら言った。ノアの小さな肩がびくりと震える。

「ほら、カイル。ノア君と遊んであげなさい」

「えー。こいつ、つまんなそう」

カイルは口いっぱいにクッキーを詰め込んだまま、値踏みするようにノアを見た。

その時、カイルの視線が一点に釘付けになった。ノアの胸ポケットから、金色の鎖が覗いていたのだ。

「何それ！ かつこいい！」

カイルがいきなり手を伸ばす。ノアは反射的に身を引き、胸ポケットを押さえた。

「だ、だめだよ。これは……」

「見せるよ！ 貸して！」

「だめだ！ これは、おじい様の大事な……！」

それは、エリザの父である先代公爵が生前、ノアに贈ってくれた懐中時計だった。

『ノア、時間は誰にでも平等だが、使い方はその人の品格を決める』

そう言っ、膝に乗せた孫に手渡してくれた世界に一つだけの特注品。ノアは毎朝布で磨いて大事にしており、父のいない寂しさを埋めるように話しかけていたのだ。

「ノア、友達が見たいと言っているんだから、貸してやればいいだろう？ ケチな男は嫌われるぞ」

エリザが声を上げるより早く、オスカーが口を挟んだ。

「でも……お父様、これは……」

「貸してやるだけだ。減るものじゃない」

ノアが絶望的な顔で母を見る。エリザが「いけません」と言おうとした瞬間、カイルが強引に懐中時計をひったくった。

「やったー！ すっげー！ キラキラしてる！」

カイルは勝利の雄叫びを上げ、懐中時計の鎖を振り回しながら芝生の上を走り出した。遠心力で

懐中時計が唸りを上げる。

「やめて！ 返して！」

普段は大人しいノアが、悲鳴のような声を上げて追いかける。しかし、一つ年上で体格の良いカイルのほうが足が速い。

「返してほしかったら捕まえてみろー！ バーカー！」

カイルは嘲笑いながら、庭園にある噴水の縁に飛び乗った。石造りの噴水で、水面が太陽を反射して輝いている。

カイルは追いついてきたノアを見てニヤリと笑い、懐中時計から手を離れたのだ。

「あつ」

スローモーションのように、金色の時計が宙を舞う。

——ガシャンッ。

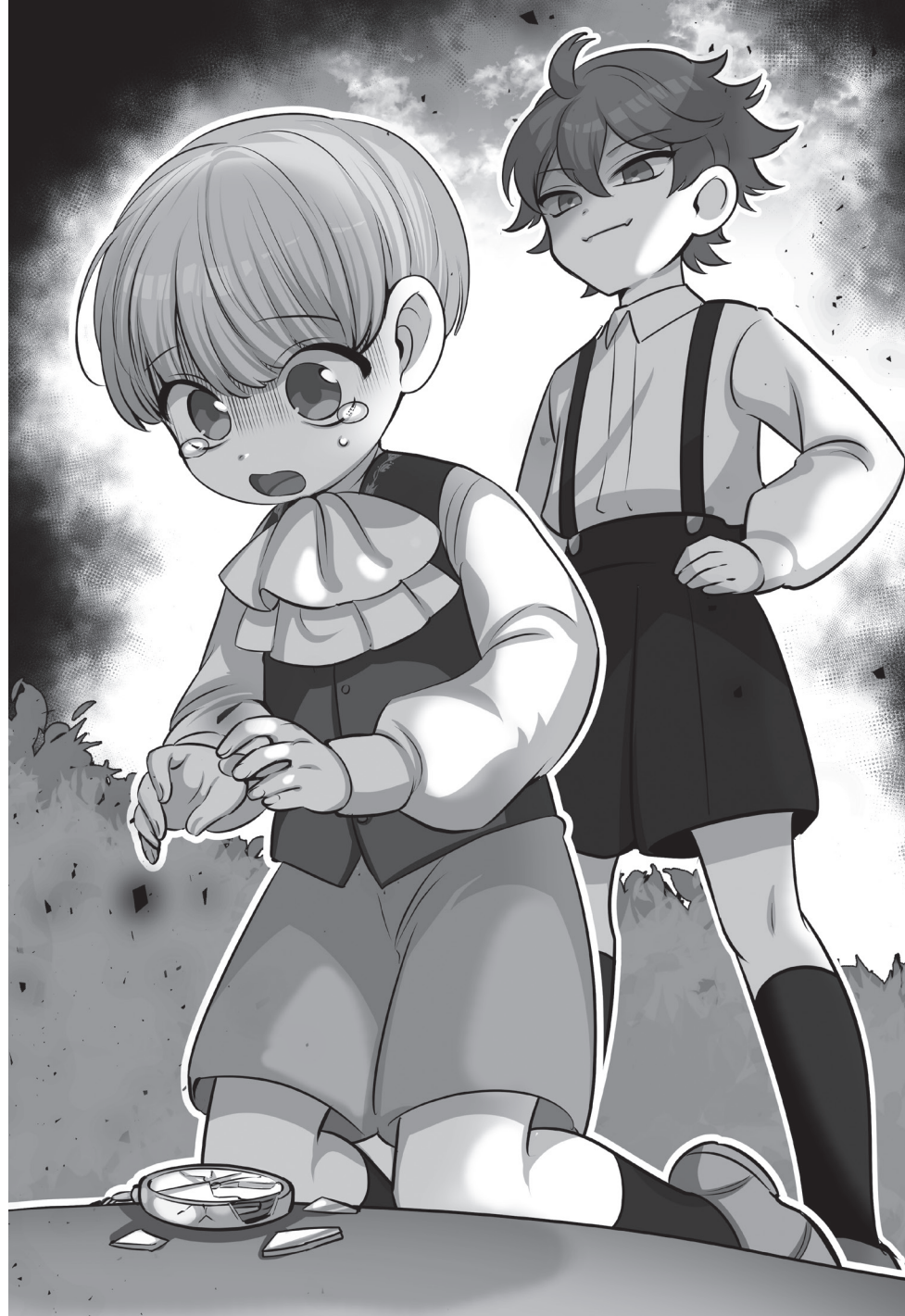
硬い音が響き渡った。

水面ではなく、噴水の硬い石の縁に時計は勢いよく叩きつけられた。繊細なガラスの風防が砕け散り、中の歯車が弾け飛ぶ音が残酷なほど鮮明にエリザの耳に届いた。

懐中時計は無惨な姿で芝生の上に転がり、二度と時を刻むことのない静寂だけが残った。

「あ……ああ……」

ノアが膝から崩れ落ちる。震える手でバラバラになった部品を拾い集めようとするが、小さな指先がガラスの破片で切れ、赤い血が滲んだ。



「ノア！」

エリザは慌てて駆け寄った。ノアを抱きしめ、ハンカチを取り出して応急手当をする。

「あーあ、壊れちゃった。脆い^{もろ}なあ」

カイルは噴水の上からそれを見下ろし、悪びれもせずに言った。

「……マリア様。これはどういうことかしら？」

エリザは震える声で、激情を必死に抑えて尋ねる。マリアは口元を手で覆い、わざとらしい悲鳴を上げた。

「やだあ！ カイルったらドジねえ。でもお、エリザ様？ そんなに怒らないであげて。子供の遊びじゃないですかあ」

「遊び？ 人の大切な物を壊しておいて？」

「だから、カイルはわざとじゃないんです。それに、いつか壊れるものでしょ？」

開き直りとも取れる言葉を投げられ、エリザの頭の中で血管が数本切れた気がした。しかし、それ以上の衝撃が背後から降ってきた。

「まあ待て、エリザ」

オスカーだった。彼はカイルを叱るでもなく、困ったような顔で妻と息子を見ている。

「マリアの言う通りだ。子供同士のじゃれ合いだろう。カイルに悪気はなかったんだ」

「悪気がなければ、何しても許されると？」

「そうは言っていない。だが、たかが時計一つで目くじらを立てるな。ノア、お前もだ。いつまで

もメソメソするんじゃない。男なら、笑って許してやるくらいの度量を持って」

度量。この男は今、被害者である息子に向かって、加害者を許せと説教しているのか。

ノアの手の中で、懐中時計は見る影もない。

オスカーはため息をつき、懐から財布を取り出した。

「わかった、わかった。俺が新しいのを買ってやる。こんな古いガラクタより、もっと良い最新式のやつをな。それでいいだろう？」

その言葉を聞いた瞬間、ノアの小さな背中から力が抜けたのがわかった。

エリザの腕の中で、息子が静かに泣くのをやめた。嗚咽おえうもしないし涙も拭わない。ただ虚無の瞳で、父親を見上げていた。

「……いりません」

消え入りそうだけど、はっきりとした声だった。

「僕、新しいのなんていりません。お父様は……何もわかってない」

ノアは母の胸に顔を埋めた。その体温だけが、冷え切ったこの空間で唯一の真実だった。

「お前はカイルと違って、可愛げのないやつだ」

オスカーは、実の息子に向かって不機嫌そうに呟く。

「カイル、怪我はないか？ 怖かったろう」

そして壊した張本人を抱き上げ、あやし始めたのだ。

エリザは感情を押し殺して、ノアを抱きかかえたままゆっくりと立ち上がった。使用人たちに目

配せをする。

執事のセバスチャンやメイドたちの目は怒りで燃え上がっていた。彼らは一部始終を見ている。

この場の証人はエリザ一人ではない。

「オスカー様」

エリザはかつてないほど低い声で夫の名を呼んだ。オスカーがビクリと肩を揺らす。

「私とノアはこれにて失礼いたします。ノアの手当てをいたしますので」

「お、おいエリザ。まだ客人が……」

「お帰りください」

エリザがマリアを睨みつけると、彼女は「ひつ」と小さな悲鳴を上げてオスカーの後ろに隠れた。

「……これ以上、私の大切な家族を傷つけるなら、相応の対応をさせていただきます」

それだけ言い捨てて、エリザは屋敷へと戻った。

「エリザ！ 待てよ、感じが悪いぞ！」

背後で夫が叫んでいたが、雑音にしか聞こえなかった。

子供部屋のベッドにノアを寝かせ、包帯を巻いた指先を優しく撫でる。

壊れた懐中時計は、宝石箱の中に大切にしまった。直せる職人を探さなければならないが、元通りにはならないだろう。

「お母様」

ノアがぼつりと呟いた。

「なあに？」

「僕……お父様のこと、もう好きじゃなくてもいい？」

その問いかけに、エリザの胸が張り裂けそうになる。子供にとって親を嫌いになることは、愛すること以上にエネルギーがいることだ。それを、わずか五歳の息子に言わせてしまった。

「……ええ。無理に好きでいなくていいのよ」

「僕、あのお兄ちゃん嫌い。マリア様も嫌い。……お父様は、僕とお母様よりあの子たちが大事なんだね」

子供は残酷なほど真実を見抜く。エリザはノアの額に口づけをした。

「ごめんね、ノア。お母様がもっと早く、強くなるべきだったわ」

涙が頬を伝う。けれど、これは悲しみの涙ではない。エリザは決めたのだ。夫への愛情は昨日死んだ。そして今日、夫への情けも消え失せた。

今のエリザにあるのは、公爵家の娘としてのプライドと、母としての激しい怒りだけだ。

あの男は、ノアの父親である資格を自ら放棄した。ならば、自分が父親の代わりになればいい。

そして、ノアを傷つけた代償は、彼らが想像するよりも遥かに高くつくことを教えてやらなければならない。

「セバスチャン」

控えていた老執事を呼ぶ。

「はい、奥様」

「懐中時計の破片、すべて集めて保管しておいて。それから、今日の出来事の詳細を記録してちょうだい。使用人全員の署名付きでね」

「かしこまりました。すでに、メイド長が書き留めております」

「優秀ね。それと、レオナルド辺境伯へ手紙を。緊急の相談がある、と」

レオナルド。冷徹なる氷の宰相と呼ばれていて、かつて私の婚約者候補でもあった男。彼なら、この腐った状況を切り裂くための最高の知恵を貸してくれるはずだ。

窓の外では、まだオスカーたちが呑気に笑っている声が聞こえる。

笑ってられるのも今のうち。

エリザはノアの手を握りしめ、心の中で誓った。

（必ず、彼らを地獄へ落とす。あなたのためなら、お母様は鬼にでも悪魔にでもなってみせるわ）
静かな怒りの炎が、エリザの瞳の奥で青白く燃え上がった。

マリアの息子カイルによる懐中時計破壊事件の翌日。

屋敷の空気は澱^{よど}んでいた。使用人たちは皆、静まり返り、廊下ですれ違う際も目線だけで会話を交わしている。

「奥様がお怒りだ」

「当然だ」

「旦那様は正気か」

エリザは執務室で、山積みになった書類と格闘していた。

領地の経営、屋敷の予算管理、そしてこれからの計画に必要な裏付け調査。ペンを走らせる音だけが、エリザの理性を現実繋ぎ止めていた。

「……奥様」

扉をノックし、中に入ってきたセバスチャンは苦渋に満ちた顔をしていた。

「どうしたの？ そんな顔をして」

「その……お客様がお見えます。お約束はないのですが、強引に……」

彼の背後から、遠慮のない足音が響いてくる。制止するメイドの手を振り払い、ドカドカと執務室に踏み込んできたのは二人の男女だった。

「よう、エリザ！ 堅苦しい挨拶は抜きだぜ！」

「ごきげんよう、エリザ様。急にお邪魔してごめんなさいねえ。でも、どうしてもお話ししたいことがあって」

王宮騎士団のブライアンと、子爵令嬢のニーナ。夫オスカーの幼馴染であり、あのマリアを含めた仲良し四人組のメンバーだ。

彼らは我が物顔でソファに腰を下ろし、メイドたちに茶を要求するような素振りを見せた。

エリザはペンを置き、冷ややかに彼らを見据えた。頭痛がする。害虫駆除の専門家を呼ぶ前に、別の害虫が湧いてきたようだ。

「……何の御用かしら。見ての通り、忙しいのだけれど」

「つれないなあ。俺たちは心配して来てやったんだぞ？」

ブライアンが大柄な体を揺すり、筋肉質の腕を組んだ。彼は騎士としては優秀かもしれないが、脳みそまで筋肉でできているような男だ。

「マリアから聞いたぞ。昨日のこと」

「ええ、私も聞きましたわ。エリザ様、あんなにひどいことをなさるなんて……私、ショックでした」

ニーナが潤んだ瞳でエリザを見る。彼女は恋愛小説の読みすぎで、現実と物語の区別がついていない夢見るお嬢様だ。

彼女の中では、この世界は真実の愛を中心に回っているらしい。

「ひどいこと、とは？」

「とぼけるなよ。子供の喧嘩に親が出てきて、マリアを追い出そうとしたんだろう？ あいつ、泣いてたぞ。『私が悪いんだ』って。カイルも怯えてた」

ブライアンが正義感をたぎらせて言う。エリザは呆れてため息をつきそうになるのを堪えた。

加害者が被害者ぶって泣きつくという典型的な手口だ。

そして、この単純な夫の幼馴染たちは、それを疑いもせず真に受けている。仲間なので仕方な

いが。

「事実関係を確認させていただきませんが」

エリザは冷静に言葉を紡ぐ。

「カイル君は息子が大事にしている亡き祖父の形見を強奪し、破壊しました。息子が怪我をしたので、手当のためにその場を去った。それだけのことです」

「だ・か・ら！ それが冷たいって言ってるのよお」

ニーナが身を乗り出し、甘ったるい香水の匂いを漂わせた。

「エリザ様、あなたは少し頭が固すぎるんじゃないくて？ カイル君はまだ子供よ？ 元氣な男の子なら、ちよつと乱暴なくらいが可愛いじゃない。それを強奪だなんて、人間きが悪いわ」

「そうそう。それにただの懐中時計だろ？ オスカーが新しいのを買ってやるって言ったのに、それを断ったんだってな。オスカーの顔に泥を塗るような真似なんかして、妻としてどうなんだ？」

ブライアンが同意する。彼らの言葉は、まるで異国の言語のようにエリザの理解を拒絶した。

形見の重みも息子の心の傷も彼らにとつては些細なことで、オスカーとマリアの機嫌を損ねることのほうが重罪らしい。

「それで？ 私にどうしろとおっしゃるの？」

「マリアとカイルに謝ってやってくれ」

ブライアンは真顔で言った。冗談ではないらしい。

「あいつらは今、心細いんだ。マリアは離婚してカイルを一人で育てていて、頼れるのは昔からつ

るんでいた仲間の俺たちしかない。オスカーは責任を感じて面倒を見ている。それは男として立派な行動だろ？ お前は妻なら、夫の友情を支えてやるのが務めじゃないか」

「そうよお、エリザ様。あなた、オスカー様とマリア様の関係に嫉妬してるんでしょう？ でもね、それは見苦しいわ」

ニーナが諭すような表情で、とんでもない持論を展開し始めた。

「二人はね、運命の相手だったの。身分の差や、家の事情で引き裂かれたロミオとジュリエットなのよ。あなたとの結婚は、残念ながら政略でしょう？ 愛のない契約じゃない」

「……ええ、政略結婚ですわ。それが何か？」

「だからこそ！ あなたは侯爵夫人という地位を持つているんだから、愛くらはマリア様に譲つてあげるべきよ。それが貴族の女性の余裕つてものでしょ？ オスカー様の心はマリア様にあるの。それを邪魔するのは、物語の悪役がすることだわ」

真実の愛。運命。悪役。ニーナの口から飛び出す単語は、どれもキラキラと輝いていて中身が空っぽだった。

不倫を純愛と呼び、本妻を邪魔者と呼ぶような自分たちの物語を、彼女は本気で信じているのだ。「……つまり、あなたたちの言い分はこうね」

エリザは指を一本ずつ立てて確認した。

「一、夫が幼馴染と浮気をし、家計を圧迫してまでも貢ぐのは『美しい友情』だから許せ。二、その愛人の子供が私の息子の宝物を壊しても、子供の遊びだから笑って許せ。三、私は地位だけあれ

ばいいから、夫の愛も時間もすべて愛人に譲り、かつ彼女たちの生活を支援しろ」

「言い方が悪いぞ！ でもまあ、大体そういうことだ！」

ブライアンは悪びれもせずに頷いた。

「浮気とか愛人とか言葉が汚いわ、エリザ様。魂の双子と言ってくださる？」

ニーナが不満げに口を尖らせる。

（魂の双子？ なんでしょうか、それは）

エリザは乾いた笑いを漏らした。

ああ、無理だ。この人たちとは、見ている世界が違いすぎる。彼らの頭の中はお花畑だ。

一年中、枯れることのない造花が咲き乱れる、無責任という名の楽園のよう。

エリザはスツと表情を消した。胸の内を押し隠し、侯爵夫人としての気品をまとい直す。

「そこまでマリア様とオスカー様の『真実の愛』を応援されるのであれば、ご提案がありますわ」

「提案？」

「ええ。オスカー様を自由にして差し上げましょうか」

二人の顔がぱつと明るくなる。

「おお！ わかつてくれたか！」

「さすがエリザ様！ やっぱり話せばわかる方だわ！」

「ただし」

エリザは冷たく言葉を続けた。

「彼が自由になるには、私と離婚する必要があります。当然、私の実家であるヴァルティア公爵家からレインバーク侯爵家への経済的支援は打ち切られます。オスカー様個人の資産はほとんどありません。借金も残るでしょう」

二人の顔から笑みが消える。

「そこで、お二人の出番です」

エリザはにつこりと、最高に美しい笑顔を作ってみせた。

「ブライアン様、ニーナ様。あなたたちが、オスカー様とマリア様の生活を支えて差し上げてくださいな。家を用意し、オスカー様の借金を返し、カイル君の養育費を払い、あのお二人の浪費を賄うのです。素晴らしいでしょう？ あなたたちの尊い友情で、彼らの愛を守れるのですから」

執務室に沈黙が落ちた。ブライアンが目泳がせて、ニーナは手で口元を押さえて動けなくなつた。

「い、いや……俺は騎士団の給料だけだし……そんな余裕は……」

「わ、私も……父が厳しいから、金銭的な援助なんて無理よ……」

さつきまでの勢いはどこへやら。金の話が出た途端、彼らの正義は急速にしぼんでいく。

「あら、おかしいですね。愛や友情は、お金や義務よりも尊いのではなくて？ 自分たちは懷を痛めず、私の実家であるヴァルティア公爵家の支援金で、彼らの真実の愛を養えとおっしゃるの？ それは随分と……都合の良い友情ですこと」

エリザの言葉は、氷の刃となって彼らに突き刺さった、はずだった。しかし、彼らのお花畑は強

固だった。

「……金の話ばかり！ やっぱりお前は心が貧しいな！」

ブライアンが顔を真っ赤にして怒鳴った。論理で勝てない時の癪癪だ。

「そうよ！ 私たちは精神的な話をしているの！ 現実的な話で愛を汚さないでちょうだい！」

ニーナもキーキーと叫ぶ。

「もういい！ 行こう、ニーナ。こんな冷血女に何を言っても無駄だ！」

「ええ。行きましょう、ブライアン。かわいそうなオスカー様……こんな鉄のような女に縛られて。私たちが支えてあげなきゃ」

二人は捨て台詞を残し、逃げるように執務室を出て行った。ボタン、と扉が閉まる音が響く。

エリザは椅子に深くもたれかかった。疲労感がどつと押し寄せてくる。

しかし、それ以上に胸の奥で燃え上がるものがあつた。

彼らは最後まで、自分たちが正しいと信じて疑わなかった。エリザの正論など、彼らの耳には悪役の嫌味にしか聞こえないのだ。

「……聞いていた？」

エリザは誰もいないはずの部屋の隅、厚いカーテンに向かつて声をかけた。

カーテンが揺れ、そこから小さな人影が現れる。息子のノアだった。包帯を巻いた手でカーテンを握りしめている。

「ノア……」

「お母様」

ノアは泣いていなかった。その青い瞳は恐怖に震えることなく、冷たく澄んだ決意をたたえている。

「あの人たち、怖かった」

「……ええ。あれは、人間の言葉をしゃべる別の生き物だから」

歩み寄ってくるノアを膝に乗せて抱きしめる。子供にあんな醜惡な会話を聞かせたくはなかったけれど、自分の父親とその友人が、どれほど救いようのない存在であるかを彼は知る必要があつた。

「僕、もう誰も信じない」

ノアがエリザの胸に顔を埋めて呟く。

「お母様以外、誰もいらない」

「それでいいわ。でもね、ノア」

エリザは息子の頭を撫でながら窓の外を見た。ブライアンとニーナが馬車に乗り込み、去っていくのが見える。

「世の中には、まともな人間もいるのよ。とても強くて、頼りになる人たちが」

ちょうどその時、ブライアンとニーナと入れ違いで屋敷の門をくぐる一台の馬車が見えた。

飾り気はないが威圧感のある黒塗りの馬車。車体には、王家に匹敵する権力を持つとされる北の辺境伯家の紋章が刻まれている。

「……来たわ」

エリザの唇が自然と弧を描く。お花畑の住人たちが去った後に現れたのは、氷点下の現実を操る男。

エリザの元婚約者候補であり、この国で最も敵に回してはいけない人物。
「行きましょう、ノア。私たちの『最強の味方』にご挨拶をしに」

エリザは立ち上がった。もう、防戦一方の時間は終わりだ。これからは、彼らが何一つ言い返せないよう徹底的に、法的にも社会的にも完膚なきまでに叩き潰す反撃の時間だ。

鏡の前で服装を整えるエリザの顔には、もはや迷いも憂いもない。あるのは、獲物を前にした狩人のような、冷たく美しい笑みだけだった。

ブライアンとニーナという名の騒音公害が去った後、屋敷には重苦しい静寂が戻るはずだった。

しかし、それはすぐに別の種類の静寂へと塗り替えられた。肌が粟立あわだつような、絶対的な権力だけが纏うことのできる威厳に満ちた静謐せいひつさだ。

玄關ホールに、コツ、コツ、と硬質な足音が響く。執事のセバスチャンが、普段の三倍は深く頭を下げて扉を開いた。

「お待ちしておりました。レオナルド・フォン・ヴェルンシュタイン辺境伯閣下。ならびに……」
セバスチャンの声が震えたのは畏怖からか、それとも歓喜からか。

「——ヴィヴィアン・ド・オルランド第一王女殿下」

現れたのは、夜の闇を切り取ったような黒い軍服風の礼装に身を包んだ男、レオナルド。その瞳は凍てつく湖面のように青く冷やかだ。

そしてその隣には、燃えるような真紅のドレスを纏った美女。扇子で口元を隠しているが、その切れ長の瞳は愉悦とサディズムに輝いている。オスカーの実姉であり、この国で最も敵に回してはいけない毒舌王女、ヴィヴィアンだ。

「やあ、エリザ。顔色が悪いな」

レオナルドがエリザの前で足を止めて手袋を外した。その声は低く、チェロの音色のように腹の底に響く。

エリザはカーテシーをしようとしたが、彼の手がそれを制してエリザの手を取った。

「他人行儀な挨拶は不要だ。……随分と痩せたのではないか？」

「色々あります。ようこそお越しくださいました、レオナルド様。それに、ヴィヴィアン殿下まで」

「ええ、来ちゃったわよ」

ヴィヴィアンがパチンと扇子を閉じた。

「可愛い義妹が、愚かな弟とその寄生虫どもに虐げられていると聞いてはね。王族として、いいえ、一人の人間として、害虫駆除の指導に来てあげたのよ」

その笑顔の美しさと恐ろしさに、控えていたメイドたちが息を呑む。

最強の援軍が到着した。エリザは張り詰めていた糸がふっと緩むのを感じ、彼らを応接室へと招

いた。

室内には、最高級の茶葉の香りが漂っていた。エリザは、一昨日から今日までに起きた出来事を淡々と話した。

オスカーによる結婚記念日のすっぱかし。それから、幼馴染のマリアとその息子と家族ごつこに興じていることや、実の息子ノアを冷遇していること。マリアの息子カイルが懷中時計を破壊したこと。そして、オスカーの幼馴染たちが語ったお花畑理論について。

話している間、レオナルドは一言も発さなかった。ただ、彼の纏う空気の温度が下がっていくのがわかった。彼の手元のティーカップに、微細なヒビが入っているように見えるのは気のせいだろうか。

一方、ヴィヴィアンは、時折「あつはは！」と乾いた笑い声を上げていた。

「傑作ね！『愛のない政略結婚より真実の愛』ですって？あの能天気なブライアンと夢見るニーナが言いそうなことだわ。脳みその代わりに綿菓子でも詰まっているのかしら」

エリザが話し終えると、深い沈黙が落ちた。レオナルドがゆつくりと口を開いた。

「……エリザ。一つ確認させてくれ」

「はい」

「君の中に、まだオスカーへの情は残っているか？例えば、彼が泣いて謝罪し、改心したとしたら、やり直す気はあるか？」

私は即答した。

「いいえ。塵^{ちり}ほども残っておりません。私が望むのは、ノアの幸福と、彼らへの相応の報いだけです」

レオナルドの瞳にわずかに光が灯った。彼は満足げに頷く。

「よかった。君がまだ彼を愛しているなら、手加減をしなければならなかったところだった」

「手加減、ですか？」

「ああ。だが、その必要がないなら徹底的にやれる」

彼は薄く笑った。その表情は、政敵を失脚させる際に見せると噂される死刑宣告の笑みのように思えた。

「まず現状を整理しよう。オスカーは君の実家であるヴァルティア公爵家の財力に依存している。マリアの生活費も、君の家の財布から出ているわけだ」

「はい。情けない話ですが」

「ならば、まずは兵糧攻めだ。だが、ただ止めるだけでは面白くない」

レオナルドがテーブルの上で指を組む。

「これからレインバーク家に王宮の監査が入ることにする。君は『監査のため一時的に資産が凍結された』と嘘をつけ。そして、オスカーの小遣いと屋敷の予算を極限まで絞れ」

「彼らは反発しますわ」

「させればいい。金が尽きた時、あの『真実の愛』とやらがどうなるのか、見ものだろう？」

ヴィヴィアンが悪戯っぽい目をして身を乗り出した。

「それから、社交界にも包圍網を敷こう。来月の建国記念舞踏会……オスカーはマリアを連れてくるつもりでしょう？」

「おそらく。先ほどブライアンたちが『マリアを追い出すな』と騒いでいましたから」

「最高じゃない」

ヴィヴィアンは、毒の滴るような甘い声で言った。

「泳がせなさい。止めちゃだめよ、エリザ。彼らに『自分たちの関係は認められた』と勘違いさせて、舞踏会という最高の処刑台上がらせるの。公衆の面前で、王家の恥晒しと不倫女の烙印を押してあげるわ」

なんという鮮やかな作戦だろう。彼らの手にかかれれば、エリザが一人で悩んでいたことはまるでチェスの盤面を整理するように次々と解決策に変わっていく。

その時、控えめにドアが開いた。包帯を巻いたノアが、不安そうに顔を覗かせたのだ。

「……お母様？」

「ノア、おいで」

エリザが手招きすると、ノアはおずおずと入ってきた。レオナルドを見るなり、彼はビクリと身をすくめる。レオナルドの冷徹な視線は、子供には怖すぎるかもしれない。

しかし、レオナルドは椅子から立ち上がり、ノアの前に片膝をついて目線の高さを合わせた。

「君がノアか。初めまして、レオナルドだ」

その声は、エリザに向けられるものよりさらに柔らかく温かかった。

「……初めまして」

「手を見せてもらえるかい？」

レオナルドはノアの包帯が巻かれた手を、割れ物を扱うようにそつと取った。そして、宝石箱から取り出し、テーブルの上に置いていた懷中時計の残骸に目をやった。

「これを守ろうとして、怪我をしたんだな」

「……うん。でも、守れなかった。おじい様の時計、僕が弱虫だから……」

ノアが唇を噛む。レオナルドは首を横に振った。

「違う。君は立派に戦った。不利な状況でも、大切なもののために傷を負うことを恐れなかった。

それは、とても勇敢な騎士の証だ」

レオナルドの大きく温かな手がノアの頭を撫でる。父親からは言われたことのない肯定の言葉を受け取り、ノアの瞳が揺れた。

「この懷中時計は、私が預かるう」

「え？」

「知人に国一番の時計職人がいる。どんなに壊れていても、必ず時計を蘇らせる魔法使いのような男だ。彼に直させよう」

「……直るの？」

「ああ、約束する。だから、君はもう自分を責めなくていい」

ノアの目から、ぼろりと涙がこぼれた。レオナルドはハンカチを取り出し、不器用な手つきでそ

れを拭った。

「泣くな。男が涙を見せるのは、すべてが終わって勝利した時だけだ」

エリザの胸が熱くなる。

（ああ、どうして私は間違えてしまったのでしょうか）

七年前、エリザは父に勧められるままに王族であるオスカーを選んできました。

レオナルドもまた、エリザに求婚しようとしていたのに、身分と家格を考慮してオスカーに譲ったのだ。もし、あの時この手を掴んでいればノアはこんな思いをしなくて済んだのに。

レオナルドが立ち上がりエリザを見た。その瞳には隠しきれない後悔と燃えるような決意が宿っている。

「エリザ。もう二度と、君とノアを悲しませるような真似はさせない」

「……レオナルド様」

「かつて私は、君の幸せを願って身を引いた。だが、オスカーはその責務を果たさなかった。だから、私はもう遠慮しない」

彼はエリザの手を取り、甲に唇を寄せた。

「これからは私が君の剣となり盾となる。すべての泥は私が被ろう。君はただ、高貴な公爵令嬢に戻って堂々と胸を張ってればいい」

「あらあら、熱烈ですこと」

ヴィヴィアンが扇子で顔を仰ぎながら茶化す。

「まだ気が早いわよ」

「準備万端だけです、殿下」

レオナルドは涼しい顔で答えた。

「さて、エリザ。反撃の開始だ。まずは手始めに……」

そう言うと、レオナルドは懐から一枚の書類を取り出した。それは、資産凍結命令書だった。一見、王宮の監査局が発行した書類のように見えるが、精巧に作られた偽物だ。

先ほどレオナルドが言っていたように、『監査のため一時的に資産を凍結する』と書かれている。

「今夜、オスカーが帰ってきたらこれを突きつけてやれ。そして、マリアへの送金をすべて止める。明日から彼らの地獄が始まる」

エリザはその書類を受け取った。もう自分は一人ではない。最強の頭脳と、最強の権力が味方にいる。

「はい。喜んで突きつけていただきます」

エリザは微笑んだ。窓の外では雷鳴が轟き始めていた。嵐が来そうだけれど、この屋敷の中だけは嵐に立ち向かうための強固な要塞となっていた。

（さあ、オスカー、マリア。あなたたちのおままごとはここまでよ。大人の喧嘩のやり方を、たっぷりと教えてあげるわ）

その日の朝、エリザの部屋にヴィヴィアンからの贈り物が届いた。大きな箱を開けると、息を呑むほど美しいドレスが入っていた。

最高級のシルクで作られた混じりけのない純白のドレス。装飾は控えめだが銀糸の刺繍が施されており、光の加減で波紋のように優美に輝く。

添えられたカードには、流麗な筆記体でこう書かれていた。

『キャンパスは白いほうが穢れがよく目立つでしょう？』

「……ふふっ」

思わず笑みを漏らした。

（さすがヴィヴィアン様）

このドレスは着飾るためのものではない。罨そのものだ。

今日の午後、王宮の庭園でヴィヴィアン主催のお茶会が開かれる。本来なら侯爵夫人であるエリザだけが招待される場だが、今回は特例として夫のオスカーと、その友人であるマリヤも招かれていた。

「奥様、お召し替えを」

メイドたちが手際よくエリザにドレスを着せていく。鏡に映るエリザは、まるで戦場に赴く聖女

のように凛としてどこか冷徹に見えた。

王宮へ向かうレインバーク家の馬車の中は、異様な空気に包まれていた。エリザは窓の外を眺め、向かいの席にはオスカーとマリヤが並んで座っている。

マリヤは一張羅のピンク色のドレスを着ていた。フリルとリボンが過剰にあしらわれ、まるでデコレーションケーキのようだ。可愛らしいと言えなくもないが、王宮の茶会に着ていくにはあまりに品がない。

「ねえ、オスカー。私、緊張しちゃう。王女様って怖い方かしら？」

マリヤがオスカーの腕にしがみつき、上目遣いで尋ねる。

「大丈夫だよ、マリヤ。姉上は口は悪いが、聡明な方だ。君の純粋さを知れば、きっと気に入ってくれる」

オスカーは自信満々に頷いた。彼の脳内では、この茶会に招待されたことによって、自分とマリヤの仲が王家に認められたと処理されているらしい。

一ヶ月前に到達した資産凍結の話はどうしたのだろうか。監査が入ったなら仕方ないと樂觀視しているのか、それともマリヤの前で格好をつけているだけなのか。

「エリザ、お前もだぞ」

オスカーが自分の妻に矛先を向ける。

「姉上の前でマリヤをいじめたり、とにかく嫌がらせのようなことはするなよ。せつかくの機会なんだ。仲良くしてくれ」

「……ええ、承知いたしました。マナーを守ってくださいる限りは」

エリザは無表情のまま答えた。

（仲良く？ ええ、精一杯歓迎させていただきますわ。ヴィヴィアン様と共に）

王宮の庭園は、百花繚乱の美しさを誇っていた。手入れの行き届いた芝生や、咲き誇る薔薇のアーチが、庭園中の花々を引き立てている。

そして、ここに集うのは国の中枢を担う高位貴族の夫人たちだ。会場に足を踏み入れた瞬間、会話のさざめきが一瞬だけ止まった。

視線の先はエリザではない。エリザの隣で、キョロキョロと物珍しそうに辺りを見回すマリアに向けていた。

場違いなピンクのドレス。貴族らしい所作の欠如。彼女が異物であることは誰の目にも明らかだった。

「あら、エリザ様。ごきげんよう」

「ごきげんよう、侯爵夫人」

知人の夫人たちが、エリザに挨拶をしてくる。彼女たちはマリアを視界に入れないよう巧みに無視を決め込んでいた。それが貴族社会における拒絶のサインだ。しかし、マリアにはそんなことは読めない。

「あ、私も！ 初めましてえ、マリアですう！」

マリアが会話に割り込むと、夫人たちの眉がピクリと動いた。

カーテシーもしない。敬称もつけない。まるで近所の井戸端会議に参加するような馴れ馴れしさのマリアを一瞥して、顔をしかめる。

「……オスカー様の幼馴染の方、でしたか」

一人の伯爵夫人が、凍りつくような笑顔で応対する。

「ええ！ オスカーとは昔っから一緒でえ、もう家族みたいなものなんですう。ね、オスカー？」

「あ、ああ。まあな」

オスカーが気まずそうに頷く。

不出来と噂されても、王族の血を引く身だ。さすがの彼も、周囲の冷やかな視線に気づき始めたようだ。しかし、マリアの暴走は止まらない。

彼女は自分が主役になれないことが不満なのだ。美しく洗練され、周囲から敬意を払われているエリザへの嫉妬が、彼女の顔を歪ませていく。

その時、庭園の奥からファンファーレが鳴り響いた。第一王女ヴィヴィアンの登場だ。

深紅のドレスを纏ったヴィヴィアンは、堂々たる貫禄で現れた。

その視線がゆつくりと会場を巡り、エリザとその隣にいる二人組で止まる。ヴィヴィアンはふわりと微笑んだ。獲物を見つけた猛禽類のような笑みだ。

「皆、よく来てくれた。今日は堅苦しい礼儀は抜きにして楽しもう」

その言葉をマリアは文字通りに受け取ったようだった。もちろん無礼講という意味ではなく、洗

練されたウィットを楽しもうという意味なのだが、残念ながら彼女に伝わるわけがない。

お茶会が始まり、エリザはヴィヴィアンの近くの席に招かれた。オスカーとマリアは末席のほうだ。それが不満なのか、マリアは頻りにこちらのテーブルをチラチラと見ている。

「エリザ。そのドレス、とてもよく似合っている」

ヴィヴィアンが紅茶を一口飲み、エリザにウインクを送った。

「ありがとうございます、殿下。殿下のセンスには脱帽いたします」

「白はいいわ。何色にも染まる準備ができています色だもの」

その時だった。マリアが立ち上がり、給仕から赤ワインの入ったグラスを奪い取った。そして、千鳥足のように歩き、エリザたちのいるメインテーブルへと近づいてきたのだ。

「エリザ様あ、私もそちでお話したいです」

護衛の騎士が動くこうとするのを、ヴィヴィアンが目で制した。マリアがエリザの背後に立つ。

（……来る）

エリザは背筋を伸ばして身構えた。

「だって、私だけ仲間外れなんてひど……あっ！」

とってつけたような悲鳴。マリアの足が、何もない平坦な芝生の上でつまづいた。彼女の手から離れたグラスが、美しい弧を描いて宙を舞う。重力に従って、赤黒い液体がエリザの背中へと降り注いだ。

バシャツ。

冷たい感触がエリザの背中に広がる。純白のシルクのドレスが、一瞬にして鮮血のような赤に染まった。会場が完全に静まり返る。

「きゃあ！ ごめんなさあい！ 私、ドジだからあ！」

マリアは大げさに口元を手で覆い、上目遣いでエリザを見た。その瞳の奥には、隠しきれない優越感が宿っている。

『ざまあみろ、綺麗なドレスが台無しね』という声が聞こえてきそうだ。

会場の空気は張りつめている。エリザの背中からワインが滴り落ち、芝生を汚していく。

エリザはわずかに間を置いてから立ち上がり、マリアを見下ろした。怒鳴りもしないし慌てもしない。ただ、憐れむような目で。

「……マリア様。お怪我はありませんか？」

「えっ？」

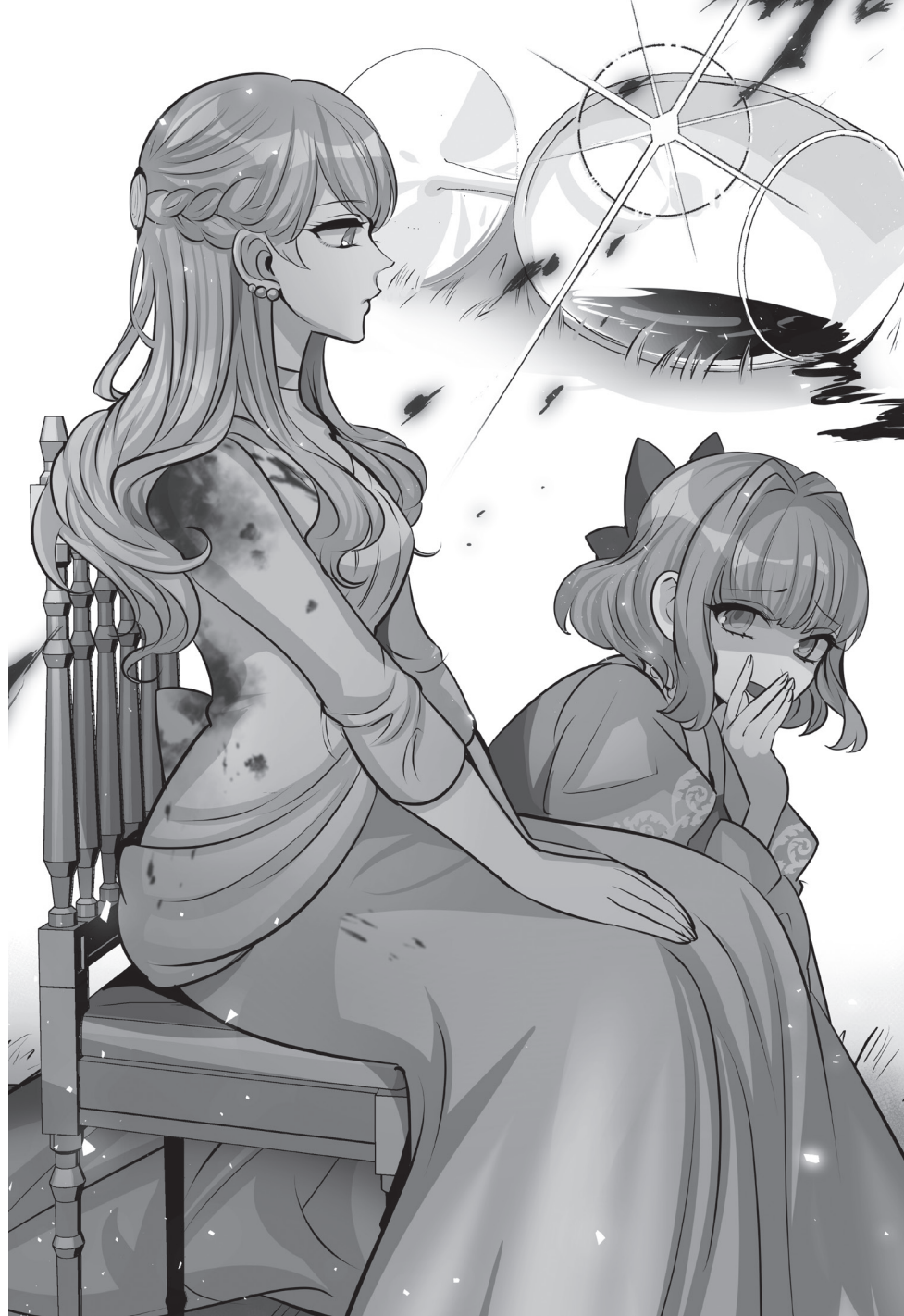
マリアが拍子抜けした顔をする。エリザが激怒するか、泣き出すと思っていたのだろう。

「エリザ！ 大丈夫か！」

そこに、オスカーが駆け寄ってきた。彼はエリザの惨状を見て息を呑んだが、すぐにマリアの肩を抱いた。

「すまない、エリザ。マリアは履き慣れない靴で転んでしまったんだ。悪気はないんだ、許してやってくれ」

「……悪気はない、ですか」



「ああ！ そうだろ、マリア？ わざとじゃないよな？」

「うんつ、わざとじゃないのお。エリザ様、怒らないでえ……怖あい」

マリアがオスカーの胸に顔を埋めて嘘泣きを始める。オスカーは自分の妻を睨みつけた。

「おいエリザ、そんな怖い顔をするな。たかがドレス一枚だろう？ マリアが反省しているんだから、笑って許すのが貴族の余裕じゃないのか？ そんなんじゃ器の小さい女だと思われるぞ」

出た。伝家の宝刀『器が小さい』

ノアの懐中時計の時と同じだ。彼はいつも被害者である妻や子供に我慢を強要し、加害者である愛人を擁護する。

周囲の夫人たちが扇子で顔を隠しながら、冷やかな視線をオスカーに向けていることに彼は気づかない。エリザは深く息を吸い、言い放った。

「オスカー様。私は別に、怒ってなどおりませんわ」

「そうか！ ならいいんだ。修繕費なら出すから……」

「ただ」

エリザは言葉を遮り、視線を彼らの背後の玉座に座るヴィヴィアンへと向けた。

「このドレスの贈り主が、どう思われるかはわかりませんが」

「は？ 贈り主？」

オスカーが首を傾げた瞬間。パチン、と扇子を閉じる音が雷鳴のように響き渡った。

「オスカー」

低く温度のない声はヴィヴィアンのものであった。オスカーとマリアがびくりと震えて振り返る。ヴィヴィアンは笑みをたたえていた。けれど、その目は一切笑っていない。氷の刃のような瞳が二人を貫いていた。

『「たかがドレス一枚」。今、そう言ったわね?」

ヴィヴィアンが優雅に立ち上がり、落ち着いた動きでこちらへ歩み寄ってくる。モーゼの海割りのように、周囲の貴族たちが道を開ける。

「あ、姉上……いや、これは言葉の綾あやで……」

「そのドレスはね」

ヴィヴィアンはエリザの隣に立ち、ワインで汚れた背中をそつと撫でた。

「私が今日のために、王宮御用達の職人に命じて作らせた、最高級のドレスなの。この国に数反たんしかない、貴重な生地を使ってね。エリザへの友情の証として贈った、私の大切な心そのものだ」

オスカーの顔から、さあつと血の気が引いていく。マリアもさすがに状況を察したのか頬を引きつらせた。

「え……王女様の、贈り物……?」

「そうよ。あなた、それを汚したの」

ヴィヴィアンがマリアを見下ろす。

「転んだ? 芝生の上で? 何も障害物のない平らな場所です? あなたの目は節穴なのかしら。それとも、王族からの贈り物を泥雑中か何かと勘違いして、わざとワインをかけたのかしら?」

「ち、違いますう! わざとじゃ……わざとじゃないもん」

「黙りなさい!!」

一喝。マリアがヒツと喉を鳴らして黙る。

「わざとでなければ、王族の贈り物を損なっても許されると? 『ドジだから』で済まされるのはね、自室で自分のスカートにお茶をこぼした時だけよ。ここは王宮。粗相はあなたを連れてきた家の恥。そして、主催者である私への不敬に当たるわ」

不敬。その言葉の重みにオスカーが震え出す。

「あ、姉上、どうかご慈悲を! マリアはマナーを知らないだけで……」

「マナーを知らない?」

ヴィヴィアンは、今度はオスカーに向き直った。弟に向けるその眼差しは軽蔑に満ちていた。

「マナーを知らない愛人を、王宮の茶会に連れてきたの? しかも、あろうことか正妻を差し置いて愛人を庇い、被害者である妻を『器が小さい』と罵った。……お前、本当に私の弟?」

「っ……!」

「王家の顔に泥を塗るのもいい加減になさい。お前のその浅はかな振る舞いが、どれほどみっともないか。鏡を見て出直してらっしゃい」

ヴィヴィアンは冷たく言い放つと、護衛騎士に顎をしゃくった。

「この二人をつまみ出して。視界に入ると紅茶がまずくなるわ」

「はっ!」

騎士たちが二人に歩み寄る。マリアは半狂乱になってオスカーにしがみつく。

「やだぁ！ 私、悪くないもん！ オスカー、なんとかしてよぉ！」

「放せ！ 無礼だぞ！ 俺を誰だと思ってる！」

オスカーが抵抗するが、騎士たちは無言で彼らの腕を取り、強引に出口へと連行していく。

「わざとじゃないもん！」

追い出される間際まで、マリアは興奮したまま騒ぎ続けていた。

周囲の夫人たちからは、嘲笑と軽蔑のささやきが漏れていた。

「まあ。なんて恥知らずなんでしょう」

「あんな女を連れてくるなんて」

「レインバーク侯爵も落ちたものね」

「社交の場にそぐわないかと存じますわ」

「ええ、あのような態度では、品位が疑われますよ」

「お育ちが表れてしまっているようですわね」

「それにあの方、感情のままにお話しになる癖がおありのようですわ」

「少々、精神的に幼さが残っていらっしゃるように見えましたけど」

「もう少し言葉を整えるお勉強が必要かもしれませんわね」

二人の姿が見えなくなるまで、庭園は冷ややかな会話で満ちていた。

彼らが去った後、ヴィヴィアンはふうとため息をつき、エリザに向き直った。その表情は、先ほ

どの鬼のような形相から一転、慈愛に満ちたものに変わっている。

「ごめんなさいね、エリザ。私のドレスのせいで、あなたに不快な思いをさせてしまったわ」

「いいえ、殿下」

エリザは背中が濡れて冷たかったが、心はこれ以上ないほど晴れやかだった。

「最高の余興でしたわ。あの二人の顔……一生忘れられません」

「ふふっ、そう言ってもらえると嬉しいわ。それに……」

ヴィヴィアンはエリザの耳元で囁いた。

「このドレス、実は二着作らせてあるの。今すぐ着替えてらっしゃい。お茶会はこれからが本番よ」

「……殿下には、敵いませんね」

エリザは騒ぎを起こしてしまったお詫びとして、庭園内の夫人たちに向かって深くカーテシーをした。すると、すぐに温かな拍手が湧き起こる。それはかわいそうな被害者への同情ではなく、毅然と振る舞った貴婦人への称賛の拍手だった。

エリザは背筋を伸ばして控室へと向かう。

（オスカー、マリア。今日のこれは、ほんの挨拶代わりよ）

あの二人が失ったのは、単なる面目だけではない。社交界において最も大事な信用——貴族にとって命よりも重いパスポートを失ったのだ。

（さあ、次は経済的な制裁ね）